

P-139 下大静脈フィルターが有用であった肺梗塞と血栓性静脈炎を合併した子宮筋腫の 1 例

大阪・済生会吹田病院

谷川正浩, 石丸公子, 岡田 誠, 松島有里, 北田文則, 渡部道雄, 岡田弘二

【はじめに】下肢の血栓性静脈炎は重篤な合併症である肺塞栓を併発することが知られている。骨盤内腫瘍は下大静脈、骨盤内静脈を圧迫し血流の停滞をまねき、深部静脈血栓の発生要因となる。我々は、子宮筋腫が原因と考えられる肺梗塞を合併した血栓性静脈炎患者に下大静脈フィルターを留置し筋腫核出術を行い、良好な経過をとった症例を経験したので報告する。【症例】症例は39才、経妊1回、経産0回。下腹部腫瘍と右下肢の発赤・疼痛のため当科紹介となった。初診時、子宮は筋腫により小児頭大に腫大。右下肢は血栓性静脈炎と診断された。子宮は著明に腫大し、血栓性静脈炎の原因と考えられ手術適応となった。術前に下肢静脈造影と肺血流シンチグラムを行ったところ、左総腸骨静脈と右肺中葉、下葉に血流障害が認められた。胸部ダイナミック CT 検査を行った結果、右肺動脈に多発性の血栓が認められた。血栓溶解療法を施行し、手術による肺塞栓発症の予防のため、術前に右大腿静脈を穿刺し下大静脈にフィルターを留置した。手術は全身麻酔下に筋腫核出術を行い、摘出標本は1.2kgであった。術後はフィルターよりヘパリンの持続注入を行った。術後の経過は良好で、術後1週間にフィルターを抜去した。フィルター抜去時に肺血管造影を行ったが新たな血流欠損は認められなかった。退院後はワーファリンを内服投与し、血栓性静脈炎は軽快している。【まとめ】我々は、子宮筋腫が原因と考えられる血栓性静脈炎により肺梗塞を併発した症例を経験した。肺塞栓あるいは血栓性静脈炎の既往のある患者に骨盤内手術を行う際、下大静脈フィルターは有用であると考えられた。

P-140 ヒト子宮平滑筋細胞における Prostaglandin E₂ の autocrine feedback による産生促進作用に関する検討東京医歯大¹, 同医歯学総合研究科分子細胞機能学²谷口義実¹, 森田育男², 久保田俊郎², 室田誠逸², 麻生武志¹

【目的】Prostaglandin (PG) E₂ は子宮筋の収縮や血流の維持に関与し、子宮筋腫では疼痛等の諸症状にも関連している。PG 産生に関し、シクロオキシゲナーゼ (COX) -2アイソマーの存在が明らかとなり、増殖因子、炎症性 cytokine による COX-2誘導が注目されているが、それらの相互作用及び PG 自身による autocrine の PG 産生促進作用の解明はなされていない。本研究では interleukin (IL) -1 α と platelet-derived growth factor (PDGF) による PGE₂産生を検討し、産生された PGE₂による COX-2誘導作用に関し培養ヒト子宮平滑筋細胞で検討した。【方法】子宮全摘出術症例より患者の同意のもとに子宮平滑筋組織を採取し out growth 法により純培養を行い実験に供した。IL-1 α 及び PDGF 添加に伴う培養上清中の PGE₂量は ELISA 法で測定した。また PGE₂誘導体を添加した際の PGE₂産生量は、ELISA 法との交差性により COX-2の蛍光免疫染色法後、共焦点レーザー顕微鏡で定量した。【成績】IL-1 α 処置群において、無処置群に比し約13倍の PGE₂産生促進作用を認めた。PDGF 処置群においては PGE₂促進効果を認めず、また IL-1 α との組み合わせにおいても IL-1 α の促進効果に影響を与えなかった。一方、PGE₂誘導体の中で PGE₂受容体 (EP1/EP3) の agonist である 17-phenyl trinor PGE₂の添加により、有意な COX-2誘導の上昇を認めた。【結論】ヒト子宮平滑筋細胞における PGE₂産生は、PDGF では影響を受けないが、IL-1 α 等の炎症性 cytokine により産生が促進された。この PGE₂は、autocrine に EP3 (EP1) 受容体を介して COX-2の誘導を促し、さらなる PGE₂の産生促進を引き起こすことが明らかとなった。

P-141 子宮筋腫での発現亢進が確認された新しいペプチド、PEP-19について

京都大

金森崇修, 刈谷方俊, 福原 健, 東辻久子, 草刈孝史, 折井文香, 鶴田優子, 小阪千佳, 志馬裕明, 万代昌紀, 北 正人, 藤井信吾

【目的】PEP-19は calmodulin 結合能を有し、細胞内カルシウムイオン機能を修飾すると考えられている。Brain specific peptide と呼ばれ、海馬や、小脳のプルキンエ細胞など中枢神経系でのみ発現が報告されている。マイクロアレイ法により、その mRNA が子宮筋腫組織で子宮平滑筋組織より高発現している結果を得て、子宮筋腫の発生や病態に関与する可能性が示唆されたため、その検討を行った。【方法】患者の同意を得た後、同一患者からの子宮筋腫組織と子宮平滑筋組織より各々 RNA を抽出し、Northern Blot 法にて、PEP-19遺伝子の発現を比較した。また各々の組織での発現を増殖期、分泌期さらに閉経後で比較した。次に子宮筋腫組織及び子宮平滑筋組織の細胞培養、さらに子宮平滑筋肉腫細胞株での発現を検討した。【成績】PEP-19は、子宮平滑筋、筋腫両組織での発現を認め、子宮平滑筋組織に比べて子宮筋腫組織に14症例中12例に2~4倍 (2.39 $\pm$ 0.96倍) の発現亢進を認めた。これらの12例では両組織ともに増殖期、分泌期、閉経後での発現程度に明らかな差違は認めなかった。また、子宮筋腫及び子宮平滑筋の培養細胞では PEP-19の mRNA の発現は検出されなかったが、子宮平滑筋肉腫細胞株で発現を認めた。【結論】婦人科領域では未知の分子 PEP-19の子宮平滑筋、筋腫組織での発現を見出した。両組織での培養細胞で検出されなくなることより培養により発現が抑制される可能性が示唆された。子宮平滑筋に比べ子宮筋腫に発現亢進していることから、筋腫の発生や病態に関与する可能性が考えられた。